

## 教育講演

# 新カリキュラムにおける認知症教育

浦上 克哉

鳥取大学 医学部 保健学科 認知症予防学講座

認知症は本邦において2025年には700万人を超えると推計されている。これは65歳以上の5人に1人が認知症という状態である。臨床検査技師は、認知症の診断や治療に必要な検査を行うというだけでなく、認知症患者が他の病気のために受診し検査を受ける際の適切な対応力も求められる。このようなことから、日本臨床衛生検査技師会(以下、日臨技と略す)では、臨床現場での認知症患者へ対応できる臨床検査技師の専門制度である認定認知症領域検査技師制度をスタートさせた。日臨技により卒後研修の仕組みが作られ、次に望まれるのが卒前教育であった。この度新カリキュラムが導入され、認知症に関する教育内容が充実された。

認知症はひとつの病気ではなく、認知症をきたす疾患は約100種類あるといわれている。ただ、代表的な疾患はアルツハイマー型認知症、血管性認知症、レビー小体型認知症、前頭側頭型認知症などで4大認知症とよばれ、これらの疾患については熟知しておく必要がある。原因不明と考えられてきたアルツハイマー型認知症ではアミロイド $\beta$ 蛋白、レビー小体型認知症では $\alpha$ シヌクレイン、前頭側頭型認知症ではTDP-43などの原因蛋白が同定され病態の解明も大いに進んできている。認知症の診断や治療に役立つ検査法の開発も進展し、臨床検査技師の活躍の場も増えている。アルツハイマー型認知症においては症状改善薬に加え

て疾患修飾薬も承認される時代に入ってきた。

本講演では、認知症医療における現状と課題について述べ、新カリキュラムの概要と教育時押さえておくべきポイントを概説する。